

第七回 作業小屋からずっと(三)

プランを考えるのは楽しかった。

なかでも敷地にどのように建物を配置するかは結構考えた。土地は東西を対角線にしたほぼ正方形。その東隅に近いところに建物を建てられる敷地がある。その場所から土地の木立をもっとも広く見渡せるように北西に面して南北に長い建物にしてみた。北や西に面して窓を大きく取るのは住まいとしてどうかとも思うが、そのことによって太陽の光をいっぱい受けた木立を見ることができるとだ。建物の向きを決めたもうひとつの理由は、小さな二階の作業部屋からE岳を真正面に見えるようにしたかった。航空写真などを手がかりに窓が面する角度を割り出したりした。建ってみるとびつたりの角度だったのだが、山を見る視線のちょうど途中に常緑のトドマツの太木があり山を隠してしまうことがわかった。計画的配置といっても、私の場合はその程度ということか。

建物のプランもいろいろ考えてなかなか決まらなかったが、その都度、家具付きのドールハウスのような模型をつくって検討した。家具はテーブルや椅子はもとより、私にとつては重要な薪ストーブと煙突まで細々とつくってしまったのだ。その時間が楽しかったのは言うまでもない。

最終的にほぼワンルームのコンパクトな平家にもよこんと二階が乗ったかたちに収まったが、結局、作業小屋からずっと住めそうな家になってしまった。建築費もまっとうな額になってしまったのは言うまでもない。老後は便利なまちなかのマンションにと思つての蓄えを全て放出してしまったのは、今から考えると大胆な決断だったのだが、何かに憑かれたかのように工事契約書に判を押してしまった。それがどのような意味を持っていたのかを気づくには少し時間がかかるのだが。

なんだかんだあつたが、雪解けと同時に工事が始まった。

工事で重要なのは敷地の排水だった。以前住んでいた方も排水には苦労していたようで家の近くに素掘りの溝が川につながる側溝まで引かれていたが、それが役に立っていた感じはまったくなかった。よく敷地を調べると、それとは別に敷地側に立派な側溝跡が見つかった。跡と書いたのは、長い間放置されたことで、すっかり土砂に埋まって水路の役割を果たしていなかったようだ。その側溝は隣の敷地の側溝とつながっているのだが、高低差が三メートルほどあるので隣から流れ落ちた水が私たちの敷地に広がってしまったのだ。

工事をしてくれた人の話では「土砂がまるで扇状地のように広がっていたよ。」とのこと。その例えで言えば、家を建てようとしたところは扇端から先の低湿地になる。妙に納得。

側溝はもとの材料を生かして見事に復元され、ずっとそこにあつたように風景に馴染み、流れる水も綺麗だった。でも急に敷地の水が引くわけではなかった。建物の工事が始まった時に見に行ったら、建てる場所を示す目印杭が水浸しの泥のなかにぼつんとあつたのは、今でも鮮明に覚えている。でも、ここまで来れば先に進むしかなかった。

